

短期大学部

保育科 推薦入学試験 3期（自己推薦）「小論文」論題

時間：60分

〈平成二十九年度〉

次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

「いきいきしさ」

子どもの友となるに、一番必要なものはいきいきしさである。必要というよりも、いきいきしさなくして子どもの傍にあるは罪悪である。子どもの最も求めている生命を与えず、子どもの生命そのものを鈍らせずにおかないからである。

あなたの目、あなたの声、あなたの動作、それが常にいきいきしていなければならないのは素より、あなたの感じ方、考え方、欲し方のすべてが、常にいきいきしているものでなければならない。（後略）

（倉橋 惣三 『育ての心』 フレーベル新書 1976年初版）

【問 題】

筆者は、子どもの傍らにある保育者は常にいきいきしてはならないと述べています。

“いきいきしている保育者”とはどのような保育者か、筆者の考えを参考にしながらあなたの考えを述べなさい。

（600字以内・横書き。小論文の題の記入は不要です。解答用紙の一行目から小論文を書きだしてください。）

歯科衛生科 推薦入学試験 「小論文」論題一覧

(平成29年度)

時間：60分

字数：600字以内

論 題	
1期	「あなたが目指す歯科衛生士とは」について600字以内で書きなさい。
2期 (自己推薦)	「歯科衛生士のコミュニケーション能力の重要性」について600字以内で書きなさい。
3期 (自己推薦)	「未来の歯科衛生士像」について600字以内で書きなさい。

歯科衛生科 AO 入試 「小論文」論題一覧

(平成29年度)

時間：60分

字数：600字以内

論 題	
2期	「歯周病予防の重要性について」600字以内で書きなさい。

国語

〔試験入試〕
(2学科共通)

□ 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

音ほどはかきいものはあるまい。I 矢の如し、というがなぜ、とどまらずに通ずるものなかに、時計のカチカチという音は時の流れるのを刻むだけではなく、その刻んだ時と一掃に流れゆくものではないのか。

だから音は矢のように保存のきくものではないのだ。レコード盤やテープは音を保存するものではない。たゞ元の音に似た音を新たに発生する装置なのである。保存倉庫ではなくてシミュレーター(模倣装置)なのである。痛やヒキの音が保存できないように、そして「時」が保存できないように、音を保存できないのである。保存できるのはただ「物」だけであるのに、音は物ではなくその時限りの刻々の体験だからである。

もちろん、音を何かの「物」だと思っている人は多いだろう。しかしわれわれは音を物ではないにしろ何か物に似た種類のものとして考えてはいないだろうか。矢や石のような固形物ではないにせよ、風に似た何かとして(風は水と同様「物」であらう)。ふと耳に入った声、壁をつたけけになった音、川面を流れてきた音、もとの音や音は移動したり突き抜けたり入って来たりする「物」だと受け取らされてはいないか。こまや山彦が返ってくるのは何かポール様の音が岩壁で跳ね返ってくる、という風ではあるまいか。そして穴にせよ、右の耳から入った音が左の耳から抜けるといっても、要するに音は楽器やエンジンや人の口から出てきて自分の耳に到達し、そして耳の中に入る。「もの」だから、そして時は戸を立てても耳をふさいでも侵入してくる荒々しいものなのである。

こうしたり方はまことに自然である。たしかに音は「こうしたり

注意事項

1. 試験開始の指示があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. この冊子の問題部分は、全部で8ページあります。
3. 解答用紙の所定の欄に、志望学科名・受験番号・氏名を忘れずに記入すること。
4. 解答は、必ず解答用紙の指定された箇所縦書きで記入すること。
5. 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁、乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を高く挙げて、試験監督者に知らせること。
6. 試験時間は60分間です。
7. 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離してはいけません。
8. 試験終了後、解答用紙は問題冊子の上に伏せて置くこと。
9. この問題冊子は持ち帰らないこと。

方を誘うような性格をもっている。それに加えてわれわれは学校で音

波とは空気振動だと教えられ、密閉したガラスびんの中でベルを鳴らせておいて段々ポンプで中の空気を抜いてゆくとベルの音が消えてゆく、このような実験を憶えておられる人は多いだろう。こうした教育で補強されていつの間にか、音は空気振動である、つまり音は揺ら動いている空気の流れであると思いつくことになる。

しかしこの思い込みが早とちりであることは誰にもすぐわかる。かりにピアノの鍵を一つ叩いてそこから空気振動の波紋が拡がるとしよう。もしその空気振動が音であるならば、その波紋がある場所のすべてで音を立てなければならぬ。しかしもしもそんなことはない。こたまただって岩壁への往復運動中ずっと呼び声をあげているではない。だから空気振動が音だというのは単純な誤解である。それは電磁波が光だというので電磁波に色があると思いつくのと同じである。もし電磁波に色があるならば光の色は光のある所ではない。五色の電磁波のノイズに包まれて何も見えないはずだから(そして光がなければ今度は闇に包まれて何も見えない)。

だから空気振動が音であるとは何も見えない。空気振動は音をたてていない。もちろんそうだ、空気振動が音なんだからであるではない、ただ空気振動が耳に達した時に音が聞こえるのだ、と言われたい。この言は人はずいぶん述べた「出たり入ったりする音」を放棄したものである。II 「I」を認めたら、では耳に入らないう空気振動が一体どうやって音を生むのか、という問いがある。その問いとはすなわち、では耳に入らないう空気振動が一体どうやって音を生むのか、という問いがある。それは生理学者や哲学者が困惑する問いの類に当たったことになる。その問いは簡単、空気振動が耳に入って鼓膜をふるわせる、そのふるえが神経を伝って脳細胞、探偵ポロロロロロの「灰色の脳細胞」にゆく音が聞こえるというわけだ、そうだろう、と言われてそれでいるのである。これでは頭の中で音がしているように聞こえる。し

かし音楽家の聴衆の頭の中に聴音器を差し入れて聞いて何の音も聞こえないだろう。そこは全くセイジリだとはいえないにしても少なからず音が聞こえている音楽はそこには聞こえないだろう。では脳細胞が鼓膜のふるえを聞きとっているのだろうか。だがその人の鼓膜に私の耳を近づけても恐らくは何も聞こえない。それは当然だ、他人の聞いている音を盗み聞きできると思うのが間違いだ、と言われたい。他人の脳細胞が聞いている音を君が聞くことは絶対にできない。どんな盗聴装置をもしてもできない。君が盗み聞きできるのは人の話し声であってその人に聞こえていない話し声ではない、というのであればそれなら私に人に聞こえていない音を聞くことはできるはずである。だが私が外科手術を受けて自分の脳の中に聴音器を入れてもらえれば私の脳細胞が聞いている音が聞こえるだろうか。もちろんそんなことはない。もし私に聞こえるならその聴音器を他人に聞いてもらっても聞こえるはずだから。

結局「脳細胞が音を聞く」ということがおかしいのである。頭の中には音など鳴っていないのだから、音のしているのはステージの上のピアノでありチェロなのである。その音は耳元で聞こえてはいない。ましてや耳の中や頭の中で聞こえてはいない。たしかにそれはそうだが一方、空気振動や脳細胞がなければその音が聞こえないこととしたのである。そこで困惑の果て、脳細胞が音を動かす、と言いたくもなる。事実、音をはじめ感覚や思考はすべて「脳細胞の分泌物」だとか「脳の輝光」だと言っているものである。そう言う人たちは機械論的唯物論者だといって非難されているが、(主引)純正唯物論者がこの点で納得のゆく解説をしたのも私は聞いたことがない。それはともかくとしても、脳細胞のどこを押したらそんな音を出すのか、これは脳細胞の持っている生きものもなく、音を聞く生物もいない、だから夕焼けはただの電磁波、雨音はただの空気振動、そのようなのが自然科学の世界描写なのである。

二のうな世界の描写から音や色がでてくる道理がない。そこに音や色を語ろうとするならば他でもない、ただ音や色をつけ加えればよいのである。そのつけ加えには何の説明も必要ないのである。テクサンに色を加え、無声映画にサウンド・トラックを加えるのに何の説明もいらぬのと同様である。生理学者がそこに説明が必要だと感じ、そしてその説明が見当たらないに困惑するのは、空気振動や脳細胞といった生理学的世界描写がこの世界を描き尽くしていると思いついて、それがたまたまあるまいか。少なくともこの世界のすべてがその描写から引き出せるかと考えているからではないか。

だが、それはともして色や音を落としたり一方的な描写であることを承認すれば、落としたり色や音をきか加えるのに何の問題もあるまい。そしてその色や音を具体的にどのように描き加えようか、それがこの小説のみが教えてくれる。われわれはのわれわれの経験世界を描こうとしていたのだらそれは当然のことである。空気がある、鼓膜がある、脳細胞が(電氣的に)ふるえる。ここに音はない。だが、それ(それに加え)、ステージの上で音がしている。大森荘蔵「音がする」流れとむすみ、哲学断章一、産業図書による。

ち主であるわれわれ自身にもわかるまい。ステージのバイオリニストはバイオリンの弦を弓でこすっている。そこから空気振動が出てくることはわかる。だがその「音」は私の脳細胞が出したのだには到底理解できることはない。またそのバイオリニスト自身もバイオリンの弦の音ではなく自分の脳細胞の出す音に聞きほれている。それゆえ現代の生理学者が言うことはそれに近いのであるまいか。空気振動や電磁波という外界からの物理的刺激を脳細胞が「データ処理」してわれわれの知覚が生じる。こうわれわれは聞かされている。だが「知覚が生じる」とはつまりその「知覚が創られる」とではないのか(空気の音の場がその典型である)。そして物理学者も化学者もまた、専門外を口実に守秘義務を守らない限り、それに近いことを考えざるを得ない。

こういった迷霧から抜け出る最上の方法は「ボクは日常にもどることではあるまいか。音が聞こえる、このまったく日常」の状態だ。空気振動だと脳細胞だとばかりに気を取られるのは偏頗ではないか。こうした科学的描写は日常の生きた状況のいわば無声映画なのである。しかしこの映画をどうひねくくっても音がでてこないと当然なのである。そこで困って脳細胞に無理に音や声を聞いてもらおうとする。しかし脳細胞自身がまたこの無声映画の登場人物なのだからそれは無理というものである。

音だけでは、元来、自然科学の世界描写といものは音なし、色なし、味なし、匂いなし、要するに眼耳鼻舌身意の六根抜きの世界なのである。六根清浄ではなく六根根根の描写なのである。人ひとりおらず一匹いないとも通用する描写なのである。今から三〇〇年前、感覚器官を備えた生物が皆無の地球の風景を描写できる方式の描写なのである。そこには音を聞き色を感じる生物は一つとしていなかったのだから音や色を云々することは意味がない。夕焼けを赤く感

- 六根：仏教用語で、人間の五感に意識を加えたもののこと。
- 問一 傍線部A、オと共通の漢字一字を用いるものをそれぞれ次の中から適当に番号で記せ。
- 1 羊を追って、番号で記せ。
 - 2 捜査は五里山チウウの状況だ。
 - 3 メンジンを拾う。
 - 4 サライな出来事。
 - 5 ノウリに浮かぶ。
 - 6 ジャブヤク十八歳。
 - 7 キンヨウ満面の笑顔。
 - 8 シロウトの考え。
 - 9 ビジョウな仕打ち。
 - 10 ジョウマク注射。
- 問二 傍線部A、Eの語には一部誤用がある。正しいものは○を、誤っているものについては次の中から正しいものを選び、番号で記せ。
- 1 さりとて 2 だから 3 そのうえ
 - 4 さらに 5 しかし
- 問三 空欄I(二カ所)に入る適切な語を、正しい漢字で記せ。
- 問四 空欄IIに入る適切な語句を次の中から選び、番号で記せ。
- 1 出入りするは空気振動であって音ではない
 - 2 一度耳に入った音は外に出ることはない
 - 3 こたまたま目撃はほんとうは音ではない
 - 4 空気があれば音は決して伝わらない
 - 5 生理学者や哲学者は音を説明できていない
- 問五 傍線部A「こうした方を誘うような性格」の説明として適切なものを次の中から選び、番号で記せ。
- 1 保存のきくものという性格
 - 2 機械による再現が可能という性格
 - 3 岩壁に反射したり壁を突き抜けるという性格
 - 4 空気があれば伝わらないという性格
 - 5 他人が聞いているものとは盗み聞きできないという性格

問六 傍線部も「脳細胞自身がまたこの無声映画の登場人物なのだ」

1 音を創るのには脳細胞以外の働きだ、ということ。
2 脳細胞の創る音を聞くことはできない、ということ。
3 生理学では人間の経験世界を描写できない、ということ。
4 音は脳細胞が創ると生理学者が説明している、ということ。
5 科学的描写は脳細胞が生み出している、ということ。

問七 傍線部。「その付加えには何の説明も不用である」と言

傍線部を、四十五字以内(句読点も一字に数える)で次の中

から選び、番号で記せ。

1 実際には音があるのはステージの上だけだということ。
2 物質としての音というものは存在しないということ。
3 自然科学の世界描写では音を説明できないということ。
4 脳細胞に聴音器を付けても音は聞けないということ。
5 音は「する」もので「ある」ものではないということ。

問九 次の1-5の中で、本文の内容に合致するものにはA、合致し

ないものにはBを記せ。

1 こだまや山彦が高くてくのは、実際に音が反射するせいでは

なく、脳細胞がそのように感じているだけのことである。

2 「空気振動」こそが「音」を物質化したものだと考えれば、生

理学者や哲学者の困惑は解消される。

3 「脳細胞が音を聞く」と、「脳細胞が音を創る」は、両内容を

言い換えたものである。

4 物理学者や化学者なら、守秘義務さえなければ経験世界を描写

することは可能である。

5 生理学者が、音があるという経験的事実を自分たちの知見で

説明できると思っているところに誤りがある。

問十 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

鑑賞される「美」よりも「用の美」、つまり用いられるなかで立ち

現れてくる「美」を、柳宗悦はよく愛した。それが「用の美」

が「美」であるのは何によってあるのか、と作ること、用

いることそのことの内容からあらわすこと、そこに柳の本来的な課

題があった。

「民藝」と「工藝」を併用するなかで、柳がその根拠として「用の

美」を言うとき、そこには、権威を脱し裝飾を極める「I」な

工業や、「藝術」家としての個人作家による工業への反動が、あき

ともいわれるように、それはいつてみれば「数もの」なのである。柳

も指摘するように、「何人前」か「掛物」とか「二と組」などと

複数形でいわれ、買うほうも「対」とか「ダース」とかの単位で

求める。つまり、そこに、稀少なもの、頼りまれないというオーラ

はない。

が、まさにそこに柳は工業の特質を見いだしたのである。「二つの機

具」である。その意味で、「実用性」と「多量性」と「廉価性」と

は分離することのできない概念なのである。これらの概念を連底して

いるのはいうまでもなく(《反復性》)という契機である。ただ、この《反

復性》についても、それがたまたま実用性と「多量性」と「廉価性」

とだけつながるのであれば、ちなみに柳は「工業美」の特質として、

このほかに「公有性」「法式性」「模倣性」「非個人性」「間接性」「不

自由性」も挙げている。手仕事よりも機械による制作のほうがはる

かにそれに適うはずである。制作の速度、びたり同じものを作る正確

さでもはるかに勝る。

けれども、柳は言う。機械による制作は大きな資本を必要とする

から、当然のことだがその工場は大規模な企業として経営される

かない。それとともに、工場がまず家庭か工場に移る。工人は「自

作」から「雇用工」つまりは労働者になる。その上で、なにより

「腕」がものをいう。「II」の主人「であつたはずの工人は、「機

械に支配される」(《反復性》)のうちに見届けようとするのはそう

うものではない。大量に作り出さるような品は(C)「平凡」では

あるが、しかし「多く作る」となれば現れぬ美がありはしないか

と問うて、柳はこう書く。

瀬戸や品野で焼かれた石皿や行血皿の絵柄を見せしように、お

な

は「伎倆」と書くと「技術」と技巧である。その「二つ」を、それぞれ

に典型的な例を挙げつつ以下のように説明する。

まず、「伎倆」である。それは「腕前」とか「手並」「手際」と言い

習わされてきたもので、「腕の確かさ」や「手/下手」「器用/不器

用」の区別もこれをめぐっていわれる。

例えば輪轆で「腕の確かさ」といふ。誰も慣れなければ、それを

をうまく廻転して、素地に形を与えることが出来ない。仮令出来

ても色々と程度の差が生じよう。ここでうまく廻転するためには腕を

磨かねばならない。この修行が出来ないと一人前の職人にはなれ

ない。機を磨るにしても、竹を編むにしても、漆を塗るにしても、

手際が要る。これを「腕」というのである。(中略)うまく出来て

いると呼ばれるものはこの伎倆の如何によることだ大きい。

ここでは、いうまでもなく、ひたすらくり返し行なうことが「伎倆

を上げる。

次に「技巧」である。これは、手の仕事、つまり「手際」ではなく

て、「E」(おたねの仕事)つまり「智慧」だということ。ここは

「熟練」ではなく「理解」が問題になるという。

例えば藍染を例にとろう。先ず、藍玉を湯に入れておくとしよう。

水とどの位の割合にするか、またこれに何を交えたか(色を出すか、

何度ぐい掻き混ぜるか、また藍色にはどの温度が適するか、

また数多く糸染をする場合、何個型を用意するのかが得策か、また

糸を藍染するに当たり絞ったりするにどういう段取りをたたらいか、

またこれを乾かし空気を充分入れるには、どういう方法をと

つたらいいか。また色止めをするにはどう処理したらいいか。水

洗いはどの程度か。これらの細かい色々々に当面せねばなら

ない。

一般に「民芸」「工業」「芸術」「反響」「技量」「回転」と表記さ

れる。

彫琢：宝石などを、きざみ彫ること。

量に交らずしては出ない業し：大量に繰り返して作らなければなら

われない美しさをいふこと。

メチエ：フランス語で、絵画・彫刻・文字などに見られる作者の技巧

や技術のこと。

品野：焼き物で有名な愛知県瀬戸市内の町名。

高台：茶碗の底に付けられた脚部のこと。

見込み：茶碗の内面のこと。

つかふ：「つかう」の歴史的仮名づかいによる表記。

問一 傍線部1-5の漢字の読みを平仮名で記せ。

問二 空欄A-Eに入る語を、次の中から選び番号で記せ。

1 ちたば 2 わしる 3 ただ 4 たしかに

5 もらふ 6 つまり

問三 空欄I-II, IIIに入る適当な語句(二文字・三文字)を、それぞれ

本文中から抜き出して記せ。

問四 空欄I-IIIに入る適当な語句(二文字・三文字)を、それぞれ

本文中から抜き出して記せ。

問五 傍線部I-IIIに入る適当な語句(二文字・三文字)を、それぞれ

本文中から抜き出して記せ。

問六 傍線部I-IIIに入る適当な語句(二文字・三文字)を、それぞれ

本文中から抜き出して記せ。

問七 傍線部I-IIIに入る適当な語句(二文字・三文字)を、それぞれ

本文中から抜き出して記せ。

問八 傍線部I-IIIに入る適当な語句(二文字・三文字)を、それぞれ

本文中から抜き出して記せ。

- 1 作業の反復の中で、高価な作品が出来あがること。
 - 2 作業の反復の中で、職人の気息がしだいに整ってくること。
 - 3 作業の反復の中で、さまざまな変化に富んだ意匠があらわれること。
 - 4 作業の反復の度合いと熟達の度合いには、相関性を期待してはならないこと。
 - 5 作業の反復の中で、腕や手さばきが磨かれ、熟練、熟達が見られるようになること。
- 問七
次の1～5の中で、本文の内容に合致するものにはA、合致しないものにはBを記せ。
- 1 「用の美」は、才能豊かな芸術家にして初めて生み出すことができるものである。
 - 2 工人の技能には技術・技術・技巧という三重の意味があり、柳宗悦はそれぞれを等しく重視し、尊重している。
 - 3 工場の工人が「自作工」から「雇用工」になると、手仕事としての「腕」や「確かさ」は機械によって表現されるようになる。
 - 4 実用性、多量性、廉価性の三要素を有するだけでは、個人の「技能」や「技法」を示した仕事とはならない。
 - 5 生活から遊離した飾り物も、病的なまでに精巧、複雑に制作されることにより、「用の美」に至りつへてはならない。

一 二

問一

1	で	た	わ	れ
2				
3				
4				
5				

問二

A	B	C	D	E

問三

I	II	III

問四

I	II	III

問五

1	2	3	4	5

問六

1	2	3	4	5

問七 (AかBで解答)

1	2	3	4	5

問一 (番号で解答)

ア	イ	ウ	エ	オ

問二

A	B	C	D	E

問三

A	B	C	D	E

問四

A	B	C	D	E

問五

1	2	3	4	5

問六

1	2	3	4	5

問七

1	2	3	4	5

問八

1	2	3	4	5

問九 (AかBで解答)

1	2	3	4	5

国語

平成二十九年入学試験問題解答用紙

注 意

※本紙は、解答用紙の所定の欄に明確に記入すること。
 終了後は、解答用紙は問題の欄上に伏せて置くこと。

志望学科名
科
受験番号
氏 名

- 5 -

保育科 社会人特別選抜試験「小論文」論題一覧

(平成29年度)

時間：60分

字数：600字以内

論 題	
1期	<p>乳幼児期は、人間形成の基礎を培う重要な時期です。子どもが自己を十分に発揮し、心身ともに健全に育つためには、乳幼児期にふさわしい生活を送ることが必要です。</p> <p>ここで言う“乳幼児期にふさわしい生活”とは、どのような生活か、具体的に例を挙げながら、あなたの考えを述べなさい。</p> <p>*600字以内、横書きで解答用紙の1行目から書いてください。論文題名の記入は不要です。</p>

歯科衛生科 社会人特別選抜試験「小論文」論題一覧

(平成29年度)

時間：60分

字数：600字以内

論 題	
1期	<p>「超高齢社会と少子化」について600字以内で書きなさい。</p>